

# からくり人形

からくりに見た「ものづくり」の原点



くだい たまや しょうべえ  
**九代 玉屋庄兵衛**

平成7年に、兄である八代の跡を継いで九代玉屋庄兵衛を襲名。北区内の工房で、日本各地の山車だしからくりの修理・復元、創作からくりの制作を行っている。



## からくり人形とは

糸やゼンマイ、歯車などの仕掛けを使って動く人形のことです。電気を使わず、職人の腕と精巧な仕組みによって動くからくり人形は、まるで「木製ロボット」のようです。

## からくり人形の発展

からくり人形が本格的に発展したのは、江戸時代に入ってからといわれています。寛文2(1662)年、大阪で初代竹田近江かんぶんからくり人形一座が旗揚げしました。日本各地で巡業し、評判を博したことで、多くの日本人がからくり人形を楽しむようになったといわれています。



## からくり人形の種類

### ① 舞台からくり

竹田近江からくり人形一座に代表されるもので、舞台の下に人が入って人形を動かしていました。後に、大阪では人形浄瑠璃、江戸では歌舞伎、そして尾張では「山車からくり」に進化、変遷していったといわれています。

### ② 山車からくり

お祭りで使われる山車に載せられたからくり人形です。山車を用いたお祭りは全国にあります。載っているものは旧尾張藩領を中心に点在しています。愛知県には約400輛の山車があり、そのうち約3分の1にからくりが載せられているといわれています。この地方にあるからくりのほとんどの修理・復元を行ってきたのが歴代の玉屋です。



山車からくり

### ③ 座敷からくり

公家や大名が楽しむおもちゃとして発展し、江戸中期以降に数多くつくられました。その中でも代表的なものが「茶運人形」や「弓曳童子」です。



茶運人形

両手に持つ茶たぐのちやわん上に茶碗ちやわんを載せると、客の方へ向かい、客が茶碗を取ると止まる。そして、客が再び茶碗ちやわんを載せると、元の場所へと戻っていく。



弓曳童子

矢台の上にある矢を手に取り、数メートル離れた的に向かって射る一連の動きは、人の動きを見事に表現している。

# 職人さんに聞きました！

**Q** からくり人形を修理・復元するうえで、  
大変なことはなんですか？

**A** 人形の顔を作るのが大変です。修行していた頃は、いくつも能面を彫って技術を磨きました。中でも特に、「山車からくり」の全面修復にはすごく気がつかれます。地域のお祭りで使う山車に載せられるからくり人形の顔は、「町内の顔」といえます。そのままの顔で新しくしなくてはいけませんので、大変な作業です。



また、同じ材料を使って修理・復元しなければいけないことも大変です。中には、バネに使うクジラのひげなど調達するのが難しい材料もあります。

**Q** からくり人形の修理・復元以外に、どのような活動を  
されているのですか？

**A** 見学の依頼に応じて工房を公開したり、各地でからくり人形の実演をしたりしています。カナダ、ポルトガル、ロシアなど、海外で実演をすることも多いです。

修理・復元だけでなく、国内外でたくさんの人にからくり人形を知ってもらえるよう活動している九代玉屋庄兵衛さん。いずれは、初代のからくりの復元にも挑戦したいと語っています。



# 玉屋のからくり人形と名古屋

享保15(1730)年、尾張藩七代藩主となった徳川<sup>むねはる</sup>宗春は、社会を活性化するためのお祭りや芸能を奨励したことから、多くの人や文化が名古屋に集まり、「芸どころ名古屋」として名古屋は大きく発展しました。同様に、お祭りで使われる<sup>だし</sup>山車<sup>けんらん</sup>についても、江戸時代に年々豪華絢爛になっていきました。またその頃、あるからくり人形師が京都から名古屋城下玉屋町(現在の中区丸の内)に移り住み、その町名にちなんで、玉屋庄兵衛と名乗りました。これが、「玉屋」のルーツです。



▲名古屋市指定文化財「<sup>だし</sup>山車揃」名古屋まつり



▲名古屋市指定文化財「<sup>だし</sup>山車揃」名古屋まつり

それ以来、約290年に渡って、この地で「玉屋」がからくり人形に向き合い続けている間、名古屋を中心とした東海エリアは、自動車産業を主としたものづくり産業を発展させてきました。精巧で緻密な<sup>ちみつ</sup>技術を必要とするからくり人形の発展が、このエリアのものづくりの精神を育ててきたといえるのかもしれない。

